

令和5年度 学校自己評価

丹波篠山市立篠山養護学校

評価項目	成果・課題・改善策
<p>1 個別の指導計画をチームで検討し、保護者とも共通理解を図りながら作成している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画は、年度当初の作成段階にパーフェクトを求めているものではない。PDCAサイクルを機能させ、指導者個人として、チームとして何度も検討を繰り返しながら作り上げていくものである。計画も立てずに実行できるものではないため、「忙しいから」などの例外は一切作らず、また期限内に終わられるように検討期間が始まるかなり前から準備を呼びかけるなどの対策を講じたい。 ・時間の余裕のなさから思っていた以上に作成に手間取った分、チームでの検討が不十分になってしまった。また、個人懇談においても、十分に時間をとって共通理解を図ることはできなかった。適宜修正を図って作り上げていくものであるため、最初の作成段階ではもっと柔軟に対応する必要性を感じている。 ・個別の指導計画の作成は、特別支援学校において、最も力を入れて取り組むべき業務の1つであると考え。そのため、担任間で情報交換をしながらじっくりと作成できるよう、検討期間において各学部一斉に読み合わせを行う時間を確保する必要がある。 ・保護者と共通理解するうえで、懇談が1学期に一回あることが大切だと思った。どの教員が誰の評価をするのか、4月段階から明確にしておく。 ・懇談が減ったことで、保護者と実態を共有し、共通理解する機会がさらに減った。保護者と十分に共通理解を図りながら作成できたとは言えない。
<p>2 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」にそって、幼児生や保護者のニーズに対応しながら、的確で効果的な指導と支援を進めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前後期制の導入に伴い、1学期末懇談を実施しなかったことで保護者との共通理解が図りづらかった点などについて、教務部内で作成プロセスの見直しを図った。PDCAサイクルがより機能しやすくなるよう考えたが、一旦作成した計画の見直し(毎月末など)を定期的に行うよう教務部から職朝で呼びかけたり学部会で確認したい。 ・来年度の自立活動・研究推進部においても、部会が開催される日を活用するなどして、自立活動の指導目標等を中心に定期的な確認を行う方向で進める。 ・確認しながら、必要に応じて修正を図る作業ができていなかった。毎月末などに見直しを行うとともに、その旨連絡帳を通じて保護者の考えと思いを確認しながら指導と支援を進める。 ・個別の教育支援計画、指導計画に沿ってやっていることが、効果的な指導や支援になっているのか、日々の評価や振り返りが不十分であった。教師間で「意識する」「呼びかける」だけでなく、短いスパンの見直し、点検ができるシステムが必要である。
<p>3 個々の課題を明確にして、その実態や課題に応じた指導内容、方法、形態を工夫している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度、自立活動・研究推進部として新たな取り組みを進めていくことになる。キャリア教育つけたいカリストの見直しやそれに伴う実態把握、個別の指導計画をもとにした指導支援の在り方等について、方向性を検討していきたい。 ・個別の指導計画の作成については、教務部や各学部等との連携が不可欠であり、学校全体で一体的に取り組んでいく必要がある。 ・個々の類型をもとに、より効果的であると思われる方法(プリント、タブレット、発表、音響教材など)と形態(集団、グループ、個別、合わせた指導など)で指導と支援を行っている。 ・個々の児童への指導では、教員がそれぞれの実態を考えて指導できていた。集団授業でも全体の目標を把握し、個々の指導に活かしていきたい。 ・個々の生徒の課題に応じた指導や方法の工夫は、できているとは言えない。一人の教師が指導支援し関わる生徒の数が多くなっているため、学年、クラスの枠をさらに外して、指導形態ややり方を工夫する。
<p>4 自立活動において、外部専門機関との連携を密にし、指導の充実を図っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・そのような機会があるときしか連携していないため、充実しているとは言い難い。 ・岡本病院のOT・PT・STの講師招聘については、今年度各1回ずつ行った。岡本病院と確認の上、来年度は年2回ずつ招聘する方向で検討する。 ・実態を見て、この児童に必要なことは何なのかを検討してから相談するというサイクルにしていきたい。講師招聘ありきではいけない。 ・担任が直接、専門家と関わることが少ないので、OT・PT・STなど専門家との相談、学習の機会はもっとあればよい。
<p>5 ねらいや目的を明確にした学校行事・学部行事・校外学習を行い、個々の成長につなげている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体のねらいと目的をもって行えた。個に適したねらいやめあてを担任なりが設定できればもっとよかった。 ・計画的に事前学習や事後学習を行えるように、学習計画を立てる。やりっぱなしで終わらないようにする。児童の実態によって、目標、指導法を工夫していく。 ・学部行事や校外学習は、おおむね個々の生徒の成長につながっている。一方で、活動に参加しにくい、できていない生徒の参加の仕方や支援の在り方が課題である。 ・行事、活動の事前学習や準備段階で、目的を教師、生徒とも意識できるように工夫する。
<p>6 委員会活動を中心に、自治活動を活発にし、児童生徒会活動の充実に取り組んでいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会活動が円滑に活動できるように、担当職員全員で分担して行うことができた。 ・来年度も子どもの実態に応じて必要最低限の支援を行いつつ、子どもができる範囲のことに今後も取り組みたい。 ・集会などで生徒会を中心に活動の報告等を行えた。

7	<p>地域の教材や人材を積極的に活用して、ふるさと教育をはじめとする体験的学習を推進している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作業・美術・音楽で地域の方を講師に招いた。高城山や施設(図書館)、飲食店での校外学習ができた。 ・年間を通して、関わっていただける方を探す。(黒豆の収穫) ・作業学習や家庭科の授業において、ゲストティーチャーや地域活動グループの方と一緒に体験的な学習を行うことができた。また、地域の伝統文化に触れることができた。 ・学校に活動内容別に招聘できる講師の人やグループなどが分かるように人材バンクを作って蓄積していく。
---	---	--

8	<p>基本的な生活習慣や生活リズムの確立を図り、自立への基礎的な力を育成している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・タイマーを使った時間管理や私物の管理などを促しながら、自分でできることを増やすための基礎的な力を育成できた。 ・保護者との連携をより密にし、情報共有を行っていく。教師側の支援をその都度見直しをしていく(任せること、待つことなど)。 ・生活リズムの確立や自立のための力として、スマホの使い方や時間管理が大きく関係している。家庭との協力や情報共有をしていく必要がある。
9	<p>キャリア教育「つきたい力」リスト・個別のチェックシート等をもとに、発達段階に応じたキャリア教育を推進し、授業改善に取り組んでいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究授業の指導案にキャリア教育のチェックシートの観点を入れた。チェック項目の見直し・整理の準備ができつつある。 ・キャリア教育「つきたい力リスト」については、現在あるチェック項目を自立活動の6区分に再編し直し、「自立活動チェックシート(仮)」として活用し、個別の指導計画の作成に反映させていく形の運用となるよう検討を進めていく。
10	<p>作業学習、職場・施設実習、自然体験等を中心に、体験的な学習の充実に努めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部生徒対象の現場・施設実習では体験を通して自分自身の適性や社会の厳しさを感じることができた。また自分自身の卒業後の進路を考える機会にもなった。 ・作業学習、自然体験活動を通して、体験的な学習を進められた。自然体験活動では、子どもたちの実態にあった新たな活動場所を開拓できた。 ・現場・施設実習を実施する前に、どんな実習先(就労先)があるのかを、丁寧に時間をかけて知らせ、説明する時間が必要である。
11	<p>外部関係機関との連携を密にして、一貫性のある進路指導ができています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部の生徒対象に企業・事業所の本校への理解・協力を得て現場・施設実習が実施できた。また出前授業としてアパレル企業を招いて身だしなみ講座を行い、ネクタイを締めるなど社会人を意識した学習ができた。 ・関係機関との連携のもと卒業後もアフターフォローができています。 ・PTAの研修、進路部を中心に企業、事業所の施設見学ツアーを実施し、保護者も教員も進路先を知ったり、理解する機会が必要である。

12	学校事故や災害時等の緊急事態発生時の対応・体制づくりが図られている。	各種マニュアルの整備はできているが、多岐にわたるので全員が全部を熟知することが難しい。ミサイル発射の際には再確認することができた。
13	定期的な安全点検の実施、施設・設備の安全管理が図られている。	安全点検が、データ化されて集計処理が簡潔にできるようになった。また安全点検の設定を月末日にすることで、月初めや新年度、新学期を余裕を持ってすごすことができた。学期ごとにペアを交代しながら、常に複数で施設・設備の点検ができた。
14	シミュレーション研修、救急法の研修等、関係諸機関と連携して、教職員の実践的な研修や訓練ができている。	<ul style="list-style-type: none"> ・消防署の方を招いて心肺蘇生法、AEDの使い方を確認したり、学部ごとに(学部間でも)救急体制シミュレーション研修を行い、実際の動きやアクションカードの使い方を確認するなど、実践的な研修を行うことができています。今後も引き続き取り組んでいく。 ・今年度は年度初めの添乗員、運転士の救急法講習ができた。2学期始めにはスクールバスのシミュレーション研修を行えた。
15	保護者や関係機関との連携を図り、適切な医療的ケアや保健指導が推進できている。	<ul style="list-style-type: none"> ・医ケア児の同日同時登校日の漸増を含め、訪問看護等関係機関とも連携が進み、医ケア児が安全に学べる環境を整えることができた。 ・コロナ禍が明け、様々な交流の機会を増やすことによって、校内における医ケア児や医療的ケアに関する理解が進んだ。 ・今後も校内の連携を密に行い、保護者や関係機関と連携しながら、校内外での活動における安全な参加体制を整えていく。
16	教職員もPTA活動に参画し、充実を図っている。	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれが、可能な範囲で協力と参画ができた。 ・保護者と話す時間ができ、情報共有する良い時間が持てた。 ・コロナ後で、PTA活動の内容も見直される中で、教職員も会員の一人として活動の在り方、活動の見直し、改善に参画している。
17	学校運営協議会を通して、地域との連携強化に努めている。	コロナ禍がひとまず終息し、以前のような参加体制が組めるようになった。来年度、本校の50周年事業があり、校外のメンバーの皆さんが積極的かつ具体的に参画していただけるように働きかけていくことが求められる。
18	特性を踏まえたきめ細かな生徒指導が全教職員共通理解のもと推進できている。	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に実施したペアOJTにより、担任間で連携する意識を高められた。 ・生徒指導委員会では、気になる児童生徒の情報共有、今後の方向性の確認を行ったが、「全教職員共通理解のもと」については、難しいところもある。職朝等で大切なことは各担任からポイントを絞って伝えてもらう必要もある。また、「どう対応したらいいか」ということを全体に投げかけてもいいかもしれない。 ・臨時の生徒指導委員会は必要に応じて実施できた。 ・関係機関と連携しながら対応することができた。

19	特別支援教育研究者や福祉関係者との交流・研修を行うことで、高い専門性を追求している。	<ul style="list-style-type: none"> ・一昨年度末ならびに昨年度末の学校評価結果をもとに、「研修内容についてのニーズの検証をしてその結果を研修実施に活かす」という改善策を立て、そのように実践した本年度だった。 ・学校が主体となった研修会が「積極的」ではないということであれば、回数を増やすことが必要になるが、それはそれで「研修が多い」という声に対峙することになる。そのあたりを、どう考えるか。 ・昨年度1月以降、関西国際大学の中尾教授による自主研修を開催している。多くの人が参加し、積極的にスキルアップできたと思う。また、年2回実施している児童発達支援センターとの個別連絡会は、「福祉関係者との交流・研修」にあたりと捉えて差し支えないと思う。 ・そして、専門性を高めていくためには、あてがわれた(=学校等が準備した)機会だけではなく、各自が自分の興味関心に基づいて、学校の動きとは違う研修を体験することも大切だ ・今回の学校評価の結果を受け、来年度の校内研修については、今年度と同様、全10回を基本に実施する。3学期中に来年度の校内研修について希望調査を行う。それらをもとに、研修計画を立て、実施していきたい。 ・自由記述の中にあつてんかんの研修については、今年度も4月当初の幼児性の共通理解(保健関係)の中で実施している。来年度についても実施予定である。研修の中でてんかんについて、さらに聴きたい内容などがあれば、事前に教えてもらいたい。
20	教職員の資質や専門性の向上を図るため、計画的な校内研修を実施している。	
21	継続的にキャリア教育の研修を実施している。	今年度未実施だった。校外学習で電車・バスなどの公共交通機関を利用するなど児童・生徒の実態に応じて社会参加型の実施ができた。
22	研究テーマに沿って、授業力向上に向けた授業研究ができていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・日々、意識してできたとは言えない。 ・来年度の研究授業についても、全学部が授業を行うことを基本に実施する。また、今年度同様、外部講師を招聘し、事後研修会の充実を図る。 ・研究授業・事後研修会で協議した内容等について、各学部で共通理解を図り、研究授業後の指導支援につなげる。学部会等の時間を活用し、短時間でもよいので、実践したことや支援の在り方等について協議する場を設定する。事後研修会の進め方や研究授業後との取り組みについては、研究推進の中でもさらに検討していく。 ・事前の検討を重ねながら、学部全体で取り組むことができた。事後の研究にも目を向け、学部会で研究授業の反省をするなど更なる改善を目指していく。 ・研究テーマに沿って、各月の重点目標がモニターに表示されることで意識するきっかけになり、自分の授業や取組を振り返ることができた。 ・校内の授業研究に関わらず、学部内でのミニ授業研を取れることで授業力の向上につなげていく。
23	個々の課題や目標を明確にし、教職員のライフステージに応じた研修ができていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての教職員の課題やライフステージに対応した研修を、校内研修の中だけでカバーすることは難しい。そのため、研修所の研修会、小中特別支援学校の研究会、自主研修会等に参加することで、それぞれのライフステージや課題に合わせた研修になると考える。誰もが研修会や研究会に参加できる体制づくりを行った上で、研究推進でも啓発を行っていきたい。なお、中尾先生の校内自主研修会についても継続して開催していきたい。 ・新転任研修や中尾先生の自主研修会など学びの多い研修に、多くの教員が参加することができた。他校の研修会などを含め、研修に参加しやすい体制づくりを目指していく。保護者アンケートでも希望があったが、小学部段階から就労について知りたいという意見ももらった。小学部教員にも多数の希望があり、そのような研修の機会を設けていただきたい。知的の児童・生徒にもからだの学習が有効に活用できることが分かっている。全体研修などで設定されることを望んでいる。 ・「ライフステージに応じた研修ができていく」という項目で、学校全体として自己評価するのは、各教職員で項目の捉え方や基準にあいまいさがあるため評価しにくい。

24	教育活動全体の中で、相手を思いやる心を育て、生命の尊厳や人権尊重の精神を育成している。	各学部が学習内容に委ねているため、教務部として把握できなかった。今後は、部会の時に学習内容を把握できるようにするとともに、みんなが意識できるように呼びかけをしたい。
25	発達段階に応じて、情報モラルの教育に取り組んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・情報モラルの研修を行わなかったことで、情報モラルについて意識する機会が少なかった。今後も隔年ごとに研修を行っていく。 ・次年度以降、各学部ごとに情報の目標を決め、それに基づいた指導を行うように取り組んでいく。
26	給食指導を中心に、家庭と連携した食育の充実が図られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナが落ち着いて以前のように給食指導ができるようになったり、給食試食会を実施することができた。 ・これまでは食育相談が年に2回、摂食指導が1回であったが、来年度からは1学期中に食育相談1回、2学期中に摂食指導1回にする。 ・食育相談を受けることで、栄養バランスを考えた食事を幼児生本人も意識できるきっかけとなった、また、栄養教諭からのアドバイスを受け、同じ目標に向けて家庭と学校で取り組むことができた。 ・昨年度から継続して摂食指導を受けた幼児生が多く、STからの視点で前回と比較しての指導を受け、給食指導や言語指導に活かすことができた。
27	居住地、隣接校交流及び共同学習は、連携を深め、ねらいや活動内容を明確にした交流、共同学習となっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流、隣接校交流を継続して取り組み、幼児児童生徒同士の交流や学校間での連携を深めることができた。 ・高等部学校間交流について、毎年本校が主担当校になっているが、主担当校を輪番制にするなどしていけないか検討。
28	発達段階に応じて、安全教育・保健指導を実施し、安全で健康な生活が出来る基礎的な能力を育成している。	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育における保健教育の重要性は、共通理解できている。健康の保持増進に関することはキャリア教育の内容とも関連しているので、今後はそれもふまえて連携していく。 ・防災学習として、早期小学部、は救急車、消防車、放水の見学、中学部、高等部は、DVDによる学習、消火器による消火訓練を行うことができた。

29	学校教育目標・指導の重点を意識し、その具現化に向けて取り組んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・全教員のもと、学校教育目標を押さえながら教育活動が営まれていると受け取れる。 ・様々な「目標」があるため、「今年これ！」という具合に焦点化・スリム化すると、その目標を常に意識しながら指導・支援ができるのではないだろうか。 ・研推の目標(モニター表示)がどの程度達成できているか、検証してみることも必要ではないだろうか。
30	各種委員会・各部会の組織を強化し、学校運営の活性化に努めている。	<ul style="list-style-type: none"> ・部会、委員会の統合に向けて業務内容の精選、整理を行い、業務の効率化をはかっている。 ・学校運営をより活性化できるよう、学校行事や教育課程などの大幅な見直しを図った。 ・各種委員会や各部会の課題や改善点を話し合っ、来年度の見通しを各職員が持つことができた。 ・給食の欠食や管理をパソコン上で行い、個人から直接入力できるシステムに移行することができた。間違いや煩雑な業務を減らすことができた。今後は学事課や給食センターとこのシステムを連動させていこうに見当てている。
31	学校評価をもとに、教育活動の成果と課題を検証し、改善が図られている。	よりよい教育活動のもとになるよう、学校評価の内容や調査方法について今後も検討を続ける。
32	定期的な学校だより・学部通信等の発行、HPの内容の更新など、保護者や地域への情報発信ができています。	本年度も十分に評価される内容だったと言える。来年度もこの状況を継続することが大切である。
33	市内の学校園に対して、専門的な支援や助言を行うなど、特別支援教育のセンター的役割を果たしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・センター的役割については、本校が長年、本校独自の教育相談体制として伝統的に行ってきた経緯がある。以前は、現在の教育研究所のような市立の相談機関がない状況で、ささや教育相談(=学びサポートルーム)が一手に担ってきた。近年、市の機関に市費相談員が次のように配置されてきた。週1日配置(1人)→週2日(2人)→週3日(2人)。しかしながら、それによって、「学びサポートルーム」への依頼が減ったかという点、その逆であり、年々増加の一途をたどっている。検査依頼だけでなく、検査を含まないコンサルテーション、発達支援・生徒指導・学級指導ジャンルのケース会議(子ども個人、集団)も増加している。 ・県下の特別支援学校のコーディネーターは、検査を取る業務は減っている。それは、有資格者(公認心理師等)でなければ知能検査等が取れない状況が進行していることと、有資格者が必ずしもセンター校と言われる学校に配置されるわけではないからである。(本校は1名在籍、有資格者が検査機能のある特別支援学校に異動するとは限らない。) ・来年度、教育相談が1名体制になれば、本年度以上に苦しい動きになる。依頼は減らないと思われるからである。2名体制が維持された場合、検査をするのは有資格者になり、2名ともにも有資格者の場合はバランスを取りながら校外からの依頼に対応し、校内対応も本年度より増えようとする。もう1名が有資格者ではない場合は、校外からの依頼は有資格者だけで対応し、もう1人が校内対応の割合を多くすることになる。教育研究所の相談員が週4日体制になり、学サポへの依頼数が減少すれば、バランス的に変化が生じることも考えられる。このように、いろいろなことが非常に流動的である。 ・【改善策】来年度の方策として、4～6月期には、教育相談担当が計画的にすべてのクラスに出向き、子どもの様子を観察して、担任が求めてくる軽重に応じてフィードバック対応(時間、種類、量等)を決め、実施する。一通り終えたあとは、担任や学年からの依頼によって時間を取って対応する。ただし、すでに校外からの予約とその処理等が入っている場合は、それを優先して対応することになる。この校内業務を教育相談担当という括りではなく、教育支援部教員(自活、進路、教育相談)の業務として実施する可能性もある。一通り終えた後の依頼は、教育支援部への依頼というより、教育支援部個々人への依頼になると思われる。
34	ケース会議、研修会、各種行事等を活用して、外部関係機関との情報共有を図り、連携強化に取り組んでいる。	外部機関との連携強化については、この3年間で一定の方法・流れ・習慣ができあがってきたのではないかと見える。今後もこの流れを継続していく。
35	学校予算の適正な計画・執行、備品や施設の管理及び充実・改善に努めている。	各部・委員会から意見集約を図り、予算の計画的な執行、備品の充実が努めることができた。購入した備品については、担当者と連携し、おおむね適切な管理ができた。

36	<p>教職員の勤務時間や働き方を意識し、業務改善に取り組んでいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・月曜日を5校時で終了し、下校時刻を早めたことや、その他にも浸透してきたことがあると推測される。 ・来年度は、全曜日で下校時間が10分早くなることを目指して現在調整中である。また、委員会と部会が統合されることで会議の数が減るため、さらに業務時間を生み出すことができる。ここ数年で、働き方改革は順調に進んでいる感がある。 ・項目36でやっていることが、項目29にリンクしていることを随時説明し実感を伴いながら業務を進めていくことが求められる。
----	---------------------------------------	--

|

|